令和六年報恩講法話

浄土と涅槃について

正信寺　石川英和

令和六年十一月二十三日　正信寺　報恩講　法話

涅槃と浄土ついて

石川英和

【はじめに】

本日もご多忙のところ、報恩講にお参りいただきましてありがとうございます。

今年の夏は、暑いだけでなく、ゲリラ豪雨や線状降水帯が発生し、局地的に川が溢れ浸水した家もあったと聞きます。皆さまやご家族親戚の方で被害に遭われた方がいらっしゃいましたら、お見舞い申し上げます。また、被災した方々が元のように生活できるようになることを願っています。

【報恩講】

本日は涅槃と浄土についてお話しさせていただきたいと思いますが、その前に、本日は報恩講について少々お話しさせていただきます。

ご存じのように、報恩講は浄土真宗の宗祖、親鸞聖人の命日旧暦十一月二十八日にお勤めする法要です。親鸞聖人のご恩に報謝や感謝するという意味の「報恩」と、人が集まる会のことを意味する「講」を組み合わせた言葉です。浄土真宗では一番大切な仏事で、本山では、毎年十一月二十一日から二十八日までの一週間お勤めします。本山以外でも、浄土真宗のお寺や御門徒のご家庭でも報恩講をお勤めします。一般の寺院やご家庭などでは、本願寺での法要にお参りするために、期日を繰り上げて勤めることもあります。これを「お取越」や「お引上」といいます。正信寺では、毎年十一月二十三日の勤労感謝の日に法要を執り行っています。法要の後には、「お斎（とき）」をつくり、みなで一緒にいただくという伝統もあります。

北陸新幹線座席の背もたれのところに、「トランヴェール」というＪＲ東日本のフリーペーパーがあり、眼を通していたところ、浄土真宗の信仰が厚い福井県の報恩講に供されるお斎の料理について、写真付きで五ページも特集されていました。

福井県では報恩講のことを「ほんこさん」と呼んでいるそうです。「ほんこさん」で供される本膳には、白米、呉汁（ごじる）、おへら、おつぼ、紅白なますの五品が載せられるそうです。呉汁はすりつぶした大豆を味噌で溶いた汁物です。おへらは煮物碗で、大きな厚揚げの下に、大根、牛蒡、人参などの根菜と干し椎茸の煮物が隠れています。おつぼは、小豆を甘く煮たもので、親鸞聖人の好物が小豆だったことに由来するそうです。

正信寺の開基釈友教の時から、報恩講の時に、お赤飯をお供物とさせていただいております。私が小さいころからの習慣だったので、あまり疑問に思っていなかったのですが、「トランヴェール」を読んで、今更ながら親鸞聖人の好物の小豆が入ったお赤飯をお供物にしていたのかと合点がいきました。

【念仏】

日ごろの法話では「阿弥陀如来の本願を信じて、二心なく念仏すれば仏になります」ということを述べさせていただいています。なぜ念仏するのかというと、大無量寿経に書かれていることを根拠にしています。法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）が四十八の誓願を立てて長い間修行されて、その誓願が成就して阿弥陀仏になったということを信じているからです。

「およそ四十八願をもって浄土を荘厳せられ、華池や宝閣、すべて願力によらぬものはない。どうしてその中でただ念仏往生の願だけを疑ってよかろうか。のみならず、一々の願の終わりに「もしそうでなければ正覚を取るまい」と仰せられている。ところが、阿弥陀仏が仏と成られてから今まで十劫であって、成仏の誓はすでに成就せられている。そこで、一々の願はむなしく設けられたのでないことが知られる。」

法然上人は『選択本願念仏集』で、このように述べています。四十八願の最後に、誓願が成就しなければ仏にならないと言われています。成仏の誓願は成就されていて、一つ一つの願は、無駄に設けられたのではないことがわかるということで。法然上人は、四十八願すべてが本願というように考えられているのです。

親鸞聖人は、『顕浄土真実教行証文類』の信文類三の冒頭で以下のように述べています。少々長いのですが、本願寺出版社の現代語版から引用します。

「つつしんで往相の回向をうかがうと、この中に大信がある。大信心は生死（しょうじ）を超えた命を得る不思議な法であり、浄土を願い娑婆世界を厭う（いとう）優れた道であり、阿弥陀仏が選び取り回向してくださった疑いのない心であり、他力より与えられる深く広い信心であり、金剛（こんごう）のように堅固で破壊されることのない真実の心であり、それを得れば浄土へは往きやすいが自力では得られない清らかな信であり、如来の光明におさめられて護（まも）られる一心であり、たぐいまれなすぐれた大信であり、世間一般の考えでは信じがたい近道であり、この上ないさとりを開く真実の因であり、たちどころにあらゆる功徳（くどく）が満たされる清らかな道であり、この上ないさとりの徳をおさめた信心の海である。

この信心は念仏往生の願（第十八願）に誓われている。この大いなる願を選択本願（せんじゃくほんがん）と名づけ、また本願三心（ほんがんさんしん）の願と名づけ、また至心信楽の願と名づける。また往相信心（おうそうしんじん）の願とも名づけることもできる。

ところで、常に迷いの海に沈んでいる凡夫（ぼんぶ）、迷いの世界を生まれ変り死に変りし続ける衆生は、この上もないさとりを開くことが難しいのではなく、そのさとりに至る真実の信心を得ることが実に難しいのである。」

私なりに意訳します。

極楽浄土に往生したいと考えると、その中に大信があって、それは阿弥陀仏が選び取った、自力では得られない、生死を超えた命を得る極楽往生への近道で、安全で、堅固で、清らかで、優れた、功徳に満ちた不思議な法で、広大な信心の海で、さとりを開く真実の原因になります。この信心は第十八願の念仏往生の願に誓われています。選択本願、本願三心、至心信楽の願とも、往相信心とも名づけることもできます。迷いの世界に生き、輪廻転生を繰り返す衆生は、さとりを開くのが難しいのではなく、さとりに至る真実の信心を得ることが実に難しいのです。

ここで、ＮＨＫの朝ドラの『虎に翼』ではないですが「はて？」と思ったのです。

極楽往生は涅槃に入る因となるというのです。私は極楽浄土に往生すれば煩悩を滅して涅槃に入るものだと思っていましたが、極楽浄土に往生するのは涅槃に入る原因、つまり、涅槃と極楽浄土は別物という事を、よく考えていなかったのです。

【阿弥陀如来の本願】

「正信偈」には次のようにあります。

「如来所以興出世　唯説弥陀本願海」（にょらいしょいこうしゅっせゆいせつみだほんがんかい）

「如来世に興出したまう所以は、唯一、弥陀の本願海を説かんがためなり」という意味です。

「如来」とは、釈迦如来、お釈迦さまのことです。

「世に興出」とは、この世にお出ましになられたということです。

「所以」とは目的や理由のことです。

「如来世に興出したまう所以は」とは、お釈迦様が地球上にお生まれになった目的や理由は、ということです。

次に「唯説」といわれています。これは、唯一つのこと説くためであったということです。

お釈迦さまは、七千余巻ものお経になる説法をされたので、色々なことを教えられたのだろうと思いますが、親鸞聖人は、そうではなかったというのです。

お釈迦様の言いたいことは複数ではない、唯一つということです。これは親鸞聖人が、一切経を何回も読み破られてなされている断言だと思います。ですから、そのたった一つのことを知れば、仏教を全部知ったことになるというのです。

それは何かといいますと、「弥陀の本願海」といわれているのです。「弥陀の本願」とは、阿弥陀如来の本願のことです。

その深さや広さと、すべての川の水は最後に一つの海に流れ込むことから、阿弥陀如来の本願を海にたとえて本願海といわれています。

ですから、お釈迦さまが仏教で教えられていることは、阿弥陀如来の本願ただ一つということです。

ここで、本願海というのは四十八願のことか、王本願である十八願のことを意味しているのか迷うところです。

先ほど述べたように法然上人は、四十八願すべを意味していると述べています。

しかし、「正信偈」では、「本願名号正定業　至心信楽願為因」（ほんがんみょうごうしょうじょうごう　ししんしんぎょうがんにいん）と直前にあります。念仏を称えれば阿弥陀仏が極楽浄土に救ってくださる因になるという至心信楽の願を伝えるため、つまり、十八願が、唯一お釈迦様が伝えたいことだと親鸞聖人は考えていたのだと思います。

【不断煩悩得涅槃】

お釈迦様は、断食や座禅などの苦行をしてもさとりを得られませんでした。菩提樹の下でミルク粥をスジャータという村娘から与えられて、さとりを得られました。断食のような極端な苦行より、中道が良いということを知ります。そして、その時得られた真理が、三法印（四法印）でした。

諸行無常　あらゆるものは常に変化する
諸法無我　いかなるものも不変の本質を有しない
一切皆苦　この世のあらゆるものは苦である
涅槃寂静　迷妄の消えたさとりの境地は静かな安らぎである

お釈迦様が煩悩を滅して至る涅槃と極楽浄土は別物なのではないかと思って、いろいろ考えて、調べました。そうすると、お釈迦様は極楽浄土

に往生しようという考えすらなかったのだと思います。初期の仏教では煩悩を滅して心が安らかになる涅槃を目指していたわけですから。

「正信偈」の中には「不断煩悩得涅槃」とあり、煩悩を滅することなく涅槃を得ることができると記載されています。これは、お釈迦様の涅槃寂静と矛盾しないかと考えてしまうのです。

【極楽はどのようなところ？】

ここから先は、私の独自の考えです。

極楽は、地獄の対局として生まれたのではないかと言われています。悪いことをしてお金を儲けた人、悪いことをして良い生活をしている人は、いつの世にもいます。半面、人のために尽くしても、恵まれない生活をしている人もいます。

仏教では、物の生起を因果関係で説明します。ですから、今いい思いをしている人は、前世の行いが良かったと考えます。でも、今いい思いをしても悪いことをしている人は、悪い因を作っているので、次の世には悪いところに生まれる、つまり地獄に落ちるはずだと考えたのだと思います。

比叡山の横川（よかわ）で修行をされた恵心僧都（えしんそうず）、浄土真宗では源信和尚（げんしんかしょう）の名前の方がおなじみだと思いますが、源信和尚が著述された『往生要集』では、地獄を詳細に描くことで、極楽往生を願うことを娑婆世界の民に薦めたのではないかと言われています。

つまり、いま悪いことをしていると生まれ変わると地獄に落ちて、このような酷い仕打ちを受けるということを伝え、勧善懲悪的な考え方を、人々に伝えたのではないかと思うのです。

ちなみに、芥川龍之介の『地獄変』や『邪宗門』の「横川の僧都」は源信和尚のことです。異論はありますが、『源氏物語』の「横川の僧都」も源信和尚と言われています。

平安中期に同じように、悪いことをしたり、嘘をついたりすると地獄に落ちるという考えを持った人がいます。道賢（どうけん）の見聞録には、醍醐天皇が菅原道真を左遷したことで、地獄に落ちると書かれています。

また、平安末期に成立した仏教法話集『宝物集』（ほうぶつしゅう）や鎌倉時代中期の説話集『今物語』（いまものがたり）では、「紫式部は『源氏物語』という嘘を広めて多くの人の心を惑わしたために、地獄に落ちた」という話が収録されています。さらに、「源氏物語を愛読すると、同じように地獄に落ちる」と考えられていて、その罪を償うために出家し、写経をする「源氏供養」という儀式もありました。大河ドラマの「光る君へ」の話の流れでは、吉高由里子さん演じる「まひろ」が地獄に落ちるというのは、どうも想像できませんが、当時は真面目にこのように考えられていました。

極楽往生のイメージを明確にするという意味では、地獄に落ちることが、どれほど酷いものかということと対比できることは重要なのかもしれないと思います。

ただ、地獄に落ちたくないから極楽往生したいというのは、親鸞聖人の考えに反していたのではないかと思います。

【念仏による浄土往生】

念仏による浄土往生の教えで、法然上人や親鸞聖人の先達として、空也（くうや）上人、良忍（りょうにん）上人がいます。

空也上人は、平安中期の僧で、六波羅蜜寺にある運慶の四男康勝が彫った仏像が有名です。首から鉦（かね）を下げ、鉦を叩くための撞木（しゅもく）と鹿の角のついた杖をもち、草鞋履きで歩く姿を表しています。六体の小さい阿弥陀仏の像を針金で繋ぎ、開いた口元から吐き出すように取り付けられています。これは、空也上人が「南無阿弥陀仏」の六文字を称えると、阿弥陀如来の姿に変わったという伝承を表しています。

良忍上人は融通念仏宗の開祖で、平安時代後期、二十九年間にわたって大原で学び、「一人一切人 一切人一人 一行一切行 一切行一行」という境地を開きました。良忍上人が開祖した宗派の名前にある「融通」とは、「循環」と考えられています。一人の人間が称える念仏が他のすべての人に影響を与え、他の人々の念仏が一人ひとりに影響を与える、ということを意味します。ラグビーの「One for all, All for one」という考えに似ていて、個人と社会の関係性を表していると思います。個人の念仏により、すべての人々が仏陀の「浄土」において転生することができると考えたのでした。

どちらも、念仏を称えることで浄土往生するという教えを広めた僧侶ですが、念仏の価値について先人の考えを覆すものではありませんでした。すなわち、念仏という行が、自力の行に留まっていて、他力にすがるという概念をもたらしていないのです。

親鸞聖人は、念仏で極楽往生することについて、難行より易行の方が優れていると考えました。陸路を歩いて行くより船で行く方が楽であるという喩えをしています。

しかし、この喩えをそのまま信じるのは少々難しいです。つまり、言い方を変えて、鉄棒の競技をするときムーンサルトで着地するより、誰でもできる逆上がりの方が、楽で得点が良い、という表現をすると、なんだか納得できないように思えるのではないかと思います。

日本人の価値観として、誰でもできることより、努力をして道を究める方が尊いと考えがちです。しかしながら、親鸞聖人は、人間の弱さや不完全さを理解しているからこそ、自力でできる努力には限りがあり、長く修行をして本願を成就した阿弥陀仏の他力にすがる方が優れていると発想したということだと思います。それゆえ、自分の不完全さを認め、謙虚に他力にすがることしかできない自分の無力さを知ることで、一心の念仏ができると考えたのだと思います。

【涅槃と極楽】

残念ながら、私は浄土真宗の僧侶でありながら、さとりを得ているという自覚がありません。やはり、凡夫なので、死ぬまでさとりを得られないということです。

お釈迦様の教えでは、「さとり」は、真理に目覚めて涅槃に至ることだと思います。心が静かになって、煩悩により生じる邪念が起こらない境地だと思います。

残念ながら、毎日の生活の中で心が静かになることは、なかなかありません。たまに、山に登って、静寂な空間で、澄んだ空気の中に身を置き、美しい景色を見るとき、邪念が起こらないと感じることがありますが、すぐに、下山するときの大変さや、重い荷物を背負う大変さ、お腹が

すいたなどと考えてしまい、たちまちにして、世俗的な考えが頭をよぎります。

ただ、山の頂上で気持ちが集中して邪念が起こらないと感じた時、涅槃には至っていませんが涅槃というのは、このような境地なのかと感じることがあります。その時、涅槃は、山の中ではなく自分の心の中にあるように感じます。

それでは、極楽浄土はどこにあるのでしょうか。

『仏説阿弥陀経』には、「従是西方　過十萬億佛土　有世界　名日極楽其土有佛　號阿弥陀　今現在説法」とあります。

現代語訳では以下の通りです。

ここから西の方へ十万億もの仏がたの国々を過ぎたところに、極楽と名づけられる世界があります。そこには阿弥陀仏といわれる仏がおられて、今現在教えを説いておいでになります。

簡単に言うと、極楽浄土は西方のかなたにあり、阿弥陀仏という仏様がいて、今も教えを説いているというのです。

自分の中に極楽はなく、遠い西方にある仏の世界なのです。

涅槃は皆様の心の中にあり、かたや、極楽浄土は遠い西方にある場所なのです。

親鸞聖人は、念仏をして他力におすがりして、遠い西方極楽浄土への往生を願うことは、心静かな涅槃に至る因、すなわち涅槃に至る原因やきっかけということを、私たちに教えていただいているのだと思います。

涅槃と極楽は異なりますが、真摯に極楽往生を願うことができれば、心から煩悩が消えて涅槃に入る因となるというのです。この考え方は、哲学的に大変示唆に富んだ言葉だと感じています。

【おわりに】

私たちが今の世の中に生きていると、人に馬鹿にされないように生きるとか、人より裕福に生きるとか、メンツを気にしたり、社会的立場を考えたりしがちです。

地震や洪水で被災した人たちに対しても、募金と言いながら、上から目線で、可哀そうだからお金を恵んであげるという認識にならないようにしなければと思います。

親鸞聖人は、ご自分のことを「愚禿」と称していたように、自らの存在を謙虚に受け止めていらっしゃいました。

私たちも凡夫として、浅はかな自分を自覚して、念仏を称えて阿弥陀様の本願を信じて正定聚の位にいたることができれば良いと思います。

そうすると、他力によって生かされているという報恩感謝の気持ちが起きて、一心に、また真摯に念仏することができ、二心なく極楽浄土に往生することを願うことが、涅槃に入る因となるのだと思います。

本日もご清聴ありがとうございました。

蛇足ですが、帰宅されてお赤飯を召し上がるとき、小豆は親鸞聖人の好物だったとイメージして、ご賞味いただければと思います。

浄土真宗

安養山　正信寺